

# 経営と健康



## 日本経済の父「渋沢栄一」 最終回

講師 一龍齋貞花



幕末から昭和まで激流の中を生き抜き、日本経済発展に手腕を発揮し、社会事業、国際親善にも尽力した渋沢栄一。

合本組織によって共同運輸を設立し、岩崎一家の独占体制に対抗しようという正に海運戦争。

「近來の一代義拳」と書いた新聞もあったものの、船を持たぬ前から渋沢への妨害が始まり、第一国立銀行をつぶそうという。経済界の混乱のため銀行の業績は確かにはかばかしくなかった。東北各地に支店を開設したが利益に結びつかず、撤退を考えねばならぬ状態。王子の製紙会社も、東洋紡の前身である大阪紡績なども利益が上っていないかった。三菱商会は、大隈重信をバックに共同運輸をつぶしにかかった。ところが政変によって大隈が失脚し参議を辞任。大隈派の官僚も一斉に退官。

「運賃はどんどん上げる。船はボロ船で文句を言えば一向に荷物を運んでくれない」

三菱のやり方に不満もくすぶり、やがて世論も盛り上がり、政府も放っておけず三菱に対し厳しい態度を取り始める。これに対し下野した大隈が改進黨を作り政府を猛烈に非難。

その資金援助は三菱だと、政府は三菱を敵視し農商務大輔品川弥二郎は、反大隈、反三菱の強硬派で、

「三菱は、台湾との戦いや西南戦争に奉公したというが、それ以上に私腹を肥やしている。国家の事業を独占させておくからで、このまま海上の権利を三菱の手にゆだねておいてはならん」

西南戦争や台湾との戦いに、誰も引き

受けなかったので弥太郎が国のために働き、それが認められ、新政府は三菱に大金を貸し船を払い下げ、こうして三菱は大きくなっていき、三菱にも云い分があります。

三菱はびくともせず、北海道運輸会社、越中風帆船三社が合併した共同運輸をつぶそうとした。

負けじと共同も激しい競争を展開。三菱独占がうちこわされ、運賃はどんどん下落、神戸と横浜間の下等運賃五円五十銭が、なんと二十五銭に。両社とも新造船を揃え大幅なスピードアップを図り、個人経営対会社経営の戦い。岩崎は社内経費を切り詰め、更に共同運輸株の買い占めを図る。

栄一は結束を固めて防戦。こうした争いの中で、弥太郎は明治18年2月7日、「あとはお前に託す。手一杯やれ」と弟

弥之助に遺言して死去。

経営を無視した競争に両社共苦しい。両社の船が衝突事故を起すに至って、政府が調停に乗り出し、18年9月、両社は合併し資本金二千万円の日本郵船となり、勝負は引き分けとなった。

「私がもし、自分や一家の富を積もうと考えたら、三井や三菱にも負けなかつただろうよ。これは負け惜しみではないぞ」と、息子さんたちに語られたと申します。

明治18年10月22日、寛永寺護国院にて妻千代の本葬、馬車11台、人力車数知れず、行列五百人。参列者は、徳川昭武、井上馨、伊藤博文、小野善右衛門、古川市兵衛、三井八郎右衛門、三野村利助、益田孝、大倉喜八郎、浅野総一郎。静岡

の徳川慶喜から百円という破格の香典。政財界の大立者揃い、明治天皇はじめ各宮家から御供物と、栄一の素晴らしい働きが推察されます。

明治34年井上馨に総理大臣の大命。真つ先に大蔵大臣として入閣を求められたものの、渋沢が辞退したので、井上は「渋沢大臣でなければ組閣の自信がない」と首相を辞退。

喜んでホイホイ引き受ける人が多いのに、辞退した二人共すごいですね。

81歳の大正10年4月、日本の実業家50人がアメリカ各地の商工会議所から招待され、栄一が団長を務め、この年の11月、ワシントンでの軍縮会議。

軍部や右翼団体が反対していたため、会議が決裂しては日本のためにならないと、アメリカに知人、友人が多く会議の成功に尽力しようとした渡米、第29代ウオーレン・ハーディング大統領とも会談。

日米親善のため、青い目の人形と日本の市松人形の交換に尽力。1926年と27年にノーベル平和賞の候補になったのもこうした働きが評価されたからでしょう。

東京北区飛鳥山の屋敷に晩香廬という、清水建設の四代目から栄一の喜寿を祝って送られた洋風茶室があり、栄一はこよなく愛し迎賓館ともいえる建物で、

アメリカ十八代大統領グラント將軍、インドの詩人タゴール、蔣介石、徳川慶喜、伊藤博文、井上馨他訪れた民間外交の地。渋沢記念館には、83歳の時の講演の肉声レコード2枚残されていて声を聴くことが出来、畳になった三遊亭円朝の手紙も展示。

関東大震災の時には邸内を開放し食糧も援助。

昭和4年、昭和天皇から一人昼食に招待され、長年民間でよく働いた労をねぎらわれ、当時前例のない栄誉で、天皇の右隣りが栄一の席で、90歳の老人ですから特にやわらかい物が用意され、天皇と栄一のほか宮内省の高官6人だけという特例の席でした。

翌年の12月、風邪のため臥せっていると全国方面委員、現在の民生委員20人が面会を求めてきた。社会事業家の代表たちと聞くと栄一はどっしりも会うという。主治医や家族が止めても聞かない。

「今、寒さと飢えに苦しむ者が20万人います。政府は救護法という法律をこしらえたものの、予算が無いため一向に実施されていません。どうか早く実現出来ますようご尽力下さい」

「私はこの年令になるまで社会事業に尽くしてきたつもりですからよく解ります。老いぼれた身体ですが出来るだけのことを致しましょう。それが私に与えられた義務だと思っています」

すぐに大蔵大臣と内務大臣に電話。主治医が「熱のある身体で冬の外出は危険です」と止めたものの、

「もしこれが元で死んでも、20万人の不幸な人たちが救われれば、それこそ本望じゃありませんか」と大臣に面会。救護法は、翌年栄一が死去後実施され、純粹な気持ちで人々のために尽す91歳の栄一でありました。

68歳の時、お妻さんとの間に子供が出来、「ごつとも若気のいたりです……」

妻妾同居の艶福家、これが元気で永生きの元であります。

晩年多くの役員を辞職したものの、「生きていく限り、人間は辞職できないからね」と、ご子息の渋沢秀雄さんに語られたと申します。

農民出は中々もらえない爵位も、子爵を贈られています。

生涯を社会事業に尽され、昭和6年11月11日、惜しまれながら92歳の長寿をもつて大往生。

谷中霊園に、渋沢青淵という大きなお墓があり、少し離れた所に徳川慶喜のお墓もあり、銅像は常盤橋はじめ各地に数多くあります。

第一国立銀行にはじまり、東京商工会議所、東京証券取引所、王子製紙、東京電力、日本郵船、日本鉄道、清水建設、帝国ホテル、石川島造船所、東京ガス、秩父セメント、一橋大学他大学、聖路加病院、大日本ビール、他にも電灯、織物、牧畜、貿易など設立に関わった会社約五百社。社会事業関係六百。どうしてもやめることのできない実業界の7団体を引退したのが77歳、やめたくてもやめさせてくれなかった。社会事業関係は終生続けています。

身長150cm一寸、自ら血洗島の一農民で押し通し、真心と思いを大切に、単なる利益追求でなく、道徳と経済を両立させた日本経済発展に尽力。近代産業社会の基礎を築いた渋沢栄一、これを以って最終回と致します。